

教養教育オンライン交流システム「ひろば」

中串 孝志

西田 沙織

1. はじめに

2015年7月6日午前、「教養の森」センターが行う教養教育についてのFD活動の一環として、教職員・学生の各々が新たな気づきを得ることを目的とした意見交流サイト「ひろば」を「教養の森」センターのホームページ内に開設した。これは教養教育について学生・教職員が対話できるオープンな場を提供するものである。旧来の単なる記号選択式のアンケートでは不可能だった、様々な立場からのオープンな「生の声」のやり取りを交わすことで、教員・職員・学生それぞれに新たな気づきを得てもらうことを期待して設置された。本稿ではその設置に至る経緯、仕様の概略、利用例、今後の検討課題等について述べる。

2. 背景と経緯

教養科目についての質的な意識調査、数量化のみを目的とした旧来の選択式アンケートに代わる質問項目設定、などを含むような、かつ、今後も「教養の森」センターにとって必要な変更が可能な発展性のある仕組みを検討することとなった。経費の問題や、データ処理・アーカイブの容易さから、「教養の森」センターのウェブサイトにも属するページ内のサービスとして提供することになった。

授業改善のために受講生から（数量化できない）意見を集める仕組み、あるいはコミュニケーションを双方向に行う仕組みは学内にもいくつか例がある。観光学部が採用している方法では、量的な調査に自由記述欄を加えた受講生対象アンケートを授業期間終盤に行い、授業期間終了後に結果を取りまとめ、その結果に対して担当教員がコメントしたものが冊子体にまとめられ、教務係窓口にて公開される（図1）。次年度以降に引き続き同科目が開講されることを前提とした仕組みである。教員からのレスポンスを手にとって学生が見ることができる点は良いが、全ての処理が授業期間終了後に行われるためリアルタイム性に欠け、進行中の授業の補完や改善に活かすことができないため、アンケート回答者である受講生がこのアンケート調査による改善の受益者になれない。MoodleやLiveCampusにも担当教員—受講者間の双方向コミュニケーション機能があるが、学外も含めた外部からの参加が不可能な閉じたシステムである。

「教養の森」センターがこのシステムに求めている主なポイントは、

- ・ 外部に向けて公開されている

- ・外部からの参加が可能である
- ・各担当教員から独自の問いかけができる
- ・選択肢はあってもなくても良いが、必ず自由記述欄がある
- ・自由な議論も可能である
- ・交流・議論を進行中の授業に反映させることができる

であった。

具体的な検討は2014年11月頃に開始した。外注することも検討したが、予算上の問題で断念した。その後、教務課およびシステム情報学センターとの協議を重ねた。検討開始時点では、

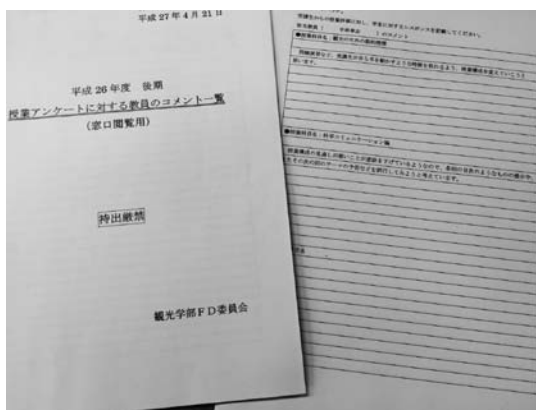


図1：観光学部の「授業アンケートに対する教員のコメント一覧」

- ・質問項目（例えばラジオボタン利用）や科目名（プルダウンメニューなど）を選択した上で、自由記述欄に記入させるような、設定された質問項目に対しての自由記述回答式のオンラインアンケートシステム
- ・それらの質問項目は、科目ごとに担当教員が設定したい質問項目と、教養科目全般に関する共通質問項目（質問例：「教養」とはいかなるものか、自分なりの答えを見つけられましたか？）の2段階のレベル設定
- ・成績疑義照会も含めて、コメンテーター名・コメント内容と当該科目担当教員ないし森センター員からの回答を表示（必要ならスレッド形式で）

といったアイデアも検討事項に含まれていた。

検討を重ねる中で、よりシンプルにした方が自由度の高い使い方が可能だろうとの判断から、質問項目の作成機能等を独立させて実装することは取りやめた。その結果、いわゆる「掲示板（BBS: Bulletin Board System）」と呼ばれる仕組みで基本的な要求事項はカバー可能である、との結論に達した。

検討されたその他の要件について触れておく。ニセ学生、あるいは他の学生を騙った書き込みができないようなチェック機構を用意する必要があるため、システム情報学センターのアカウントを用いてログインすることとした。また、進行中の授業の改善や、授業進行を補助・補完するために受講生等の声をすくい上げることが主眼であるから、学期途中では書き込めるが授業終了後には書けないようにすることとした。学生からの書き込みの心理的負担を軽減するためにフィーチャーフォン・スマートフォンに対応する必要もあった。その上で、可能であれば、

- ・ページ自体を柔らかい雰囲気（事務的な雰囲気は避ける）
- ・学生がサイトを見るように仕向ける仕掛けを実装する
- ・成績疑義申し立てもここに入れられればありがたい（全てセンター長に集中する状況だった）



図2：外部から見た状態（未ログイン状態）。LiveCampusでのシラバス検索と同じように科目を選択できる。

などの要素も盛り込みたい、ということになった。

システム構築は本稿の著者の一人である西田が全て行った。既存のサービスの仕組みを流用する案も当初はあったが、科目の選択や非ログインユーザー・学生・担当教員でそれぞれ違う権限を持たせる等、独自の機能が必要だったため、システム全体を一からオリジナルに構築することとした。また、公開後のメンテナンス（仕様変更、機能の追加など）も全て西田が行っている。

3. 実装された機能や仕様

立ち上げにあたり、このシステム全体および各部の名称を検討した。システム全体の名称としては、普段は（教養の）森の中で個々に狩猟や採集をしている人々が「集まって」「語り合う」、そして「その声を聞きつけて誰かがやってくる」ような場、との意味を込めた中串の案「ひろば」が採用された。またそもそも、「掲示板」ないし「BBS」という用語が、現実のインターネット上のそれらのサービスの状況と同じく使い古された感があるため、本システムでの用語は、昨今流行の各種ウェブサービスの用語に似たものにすることにした。¹

システムのソースは、動的にページを表示するため PHP で記述され、書き込みデータの保存にはデータベースシステム SQLite を用いている。

以下は本稿執筆時点でのシステムの概要である（「はじめにお読みください」にて公開されている）。²

- 形式は、以前からインターネット上にある「スレッド型掲示板」に似ている。
 - いわゆる「掲示板」を、ここでは Topics & Timelines と呼んでいる。
 - 個々の教養科目に限らない教養教育全般および「教養の森」センターについての Topics & Timelines と、各科目についての個別の Topics & Timelines がある（図2）。

- ・ 学生から担当教員に対して授業内容について質問したい、教員が受講生に対してアンケートを取りたい等々、何か新たにやり取りを始めたいことがあれば、新規に発言を開始＝トピックを立てることができる。



図3：教員が返信を付けて公開した後は、外部からこのように見える。

- 書き込まれたトピックについて、担当教員は返信コメントを付けることができる。
 - ・ 担当教員でないアカウントからは返信はできない。新規トピックのみ可能。
- 画像などのファイルをアップロードすることは、現状では認めていない。
- 学生・教職員は、システム情報学センターの各自のアカウントでログインすれば書き込める。
 - 当該科目の履修者・担当教員でなくても、ログインすれば書き込み可能。
 - ・ 例えば「履修しなかったけれど、今年は事情により選択できなかったが、次年度に履修したいので質問したい」などといった利用も可能。
- アカウントを持たない人も閲覧だけは可能。
 - 書き込みは、発言者の実名付きで公開される。
- 書き込んだだけでは公開されない。
 - 公開するかどうかは担当教員の権限。削除権限もある。
 - ・ 回答せず公開もしないことも可能。
 - Topics & Timelines に書き込みがあると、担当教員にメールが自動送信される。
- 現時点では非常勤講師の担当科目は含まれていないが、将来的には全科目を扱えるよう検討中。
- 学期初めの履修計画の参考にしてもらうため、新たな書き込みはできないが、前年度に開講されていた科目についても Topics & Timelines が公開される(2016年度以降)。

ここで言う「担当教員」は、教務課の保管する科目一覧表を基にしたデータからその科目の担当教員（漢字氏名）を検索し、システム情報学センターアカウン

トのデータベースとその氏名を照合して決めている。

なお、当初は当該科目を履修登録している者と教員が書き込める仕様にする構想だったが、システム情報学センターのアカウントでログインするだけでは（学績番号・氏名は関連付けることができるが）履修情報を取ることができないため、この仕様は取りやめた。むしろ、履修状況によって書き込み権限を制限しない方が、例えば次期以降の履修に興味がある人からの書き込みが可能になるなどの良い効果が見込めるだろう、と判断した。

書き込まれたテキストデータは、公開・非公開に関わらず全てアーカイブされる。「ひろば」公開時には、誰がいつアクセスしたかの記録を残す仕様にはなっていないかった。過去を含めた膨大なアクセスログの中から該当するデータを見つけ出すことは、全く不可能ではないが困難だからである。2015年11月11日より、誰かが「ひろば」にログイン・ログアウト・書き込み・書き込みの公開・書き込みの削除のいずれかのアクションを行ったときに、そのときの時刻とユーザー名、どのアクションを行ったかを記録する機能が追加されている。

立ち上げにあたり、ページ背景画像は、2014年度教養科目要綱“cicerone 2014”の表紙絵に採用された、観光学部第6期生の雑賀ひかる氏による作品を使用した。

4. 利用例

平成27年度前期授業期間の終盤だったが、「英語の歴史」（月曜4限、担当教員：遠藤史）での利用例があった。最終盤に授業の感想コメントを受講生に求めたもののだが、9件の書き込みがあり、全てに担当教員からの返信が付けられた。全てのやり取りは担当教員の判断により公開はなされていない（当事者は閲覧可能）。この事例で著者が注目したいのは担当教員からの全ての返信の中に必ず（授業への意見表明に対する）「感謝」の表明が含まれていたことである。批判的意見であってもこのような態度を明示することは、学生に対し、意見表明のあるべき姿勢のモデルを示すことにもなるだろう。

本稿執筆時点である平成27年度後期授業期間中盤において、「ひろば」が利用されている科目は2つ確認できている。1つは、「ミュージアムを創る」（木曜1限、担当教員：尾久土正己）である。今年度の履修登録者が230人超のこの科目では、昨年度までも課していた授業への出席状況の評価も兼ねたりアクションメールに加え、「ひろば」への投稿もリアクションの選択肢に含めることとした。担当教員からの素朴で率直な返信も付けられ、うまく「回って」いる様子が外部からも見られる。詳細については本号掲載の尾久土（2015）を参照されたい。もう1つの利用事例は「ミュージアムを使う」（月曜2限、担当教員：菅原真弓）である。

担当教員によると、「ひろば」の認知度を高めるため「まずは使ってみよう」と導入を試みたとのことである。現状の用途としては出席状況確認を兼ねた授業コメントが主であり、その他の出席状況確認ツール等に対する評価上の傾斜配点などはしていない。通常の出席カード（リアクションシート）よりも、授業が終わった後に時間をとってじっくり考えてコメントを書けるためではないかと推察されるが、良い感触を得ている。やりとりを公開するか否かという点については、基本的には「学生対教員」の個々の（非公開の）やりとりから始め、何らかの問題提起がなされた場合（それを期待している）に、当該学生に許可を得た後、公開をしてディスカッションができればよいと考えている。

これらはいずれも先駆的事例であり、今後の展開、利用の成果、運用上の問題点の有無等について注目されるところである。

5. 今後の検討課題

システム情報学センターのアカウントを持っていない非常勤教員が担当する科目の Topics & Timelines は、そもそも立てられない。まずは常勤教員だけで運用開始することを優先し、将来的に非常勤教員科目へ拡張していくことを検討することとしたが、そこでシステム外の条件として問題となるのが、そもそも非常勤講師に対して（授業時間外の作業となる）「ひろば」の対応を「業務」として依頼できるかどうか、である。これについては、まず「教養の森」センター長から依頼し、引き受けて頂ける場合にはシステム情報学センターよりアカウントの発行を受けた上で当該科目の Topics & Timelines の管理者になってもらい、引き受けて頂けない場合には「教養の森」センター員が引き受けることが検討されている。

新規コメントへの返信は、現状では1通のみ書き込むことが可能である。今後、ある新規トピックに対して複数の返信を付けて「スレッド」状にする様式に変更することは比較的容易に可能である。参加者からのリクエストが上がれば検討したい。

担当教員への投稿連絡通知メールは、当初は投稿があったことだけを知らせるものであったが、使用した教員より「投稿者名・内容がわかる方が良い」との希望があったため、投稿者名・内容を含むよう変更し、本稿執筆現在、試行中である。

「ひろば」は、「教養の森」センターによる教養教育活動の改善に資するためには使われなければならない。そのためには履修者等からの書き込みと、それに対する教員のレスポンスの2つの活性化が必要である。

まず、履修者等からの書き込みを増やすための方策であるが、最も単純な方法は、授業中に履修生に対し書き込みを促すことである。例えば授業内容に関する

感想等の書き込みに対しインセンティブをつける、出席点と連動させる、等が考えられる。この時、書き込みに対する最大の心理的ハードルは、実名が公開されることではないかと考えられる。無責任な流言や誹謗中傷がなされることを防ぎ、かつ、発言に責任を持つことを体験的に学習してもらうことが実名であることの目的であるが、インターネット上に出た情報（この場合は公開された書き込み内容）は原理的に消すことができないため、書き込みには慎重を要する。そこで考えられる方策であるが、例えば教員から履修者へ書き込みリクエストをする際に、実名でインターネット上に残っても大丈夫な内容や表現にしやすいような（あるいは不適切な表現が出るほどにはヒートアップしにくいような）課題設定をすることが考えられる。また、批判的内容であっても構わないことを受講生に十分に説明しておく必要もあろう。さらに、書き込みは即時公開ではなく担当教員が公開の権限を持っているので、書き込みに悪意がなくとも本人に将来的な不利益がありそうな文面の場合には「スルーする」ことも教員の役割であろう。逆に、受講生等との「交流」の場と言っても、単に仲良くなるためのものではなく、言語を介した議論をするための場であるから、「学生と教員が仲良くなる必要はない」という批判は全般的な外れである。

FD 活動としての「ひろば」システムの最大の弱点は、教員への参加強制力が弱いことである。元々、「教養の森」センターとしては、教養教育に対し積極的に取り組む意志がある教員にこそ関与・参加してもらいたいとの意向があるため、参画してくれる教員に対して何かを「強制」することは極力避けたいところではある。一方、FD 活動に教員が積極的に関わっているという事実が対外的に見えるようにすることは、現在の大学運営にとって重要であることもまた確かであり、従って「ひろば」が全開講科目で利用されることが望ましい。この点に関して、今のところ、教養科目担当教員に対して「ひろば」利用を義務付ける、ないし強制する仕組みは導入していない。そもそも、概念設計の段階で、数量化あるいは数値目標達成の発想から離れて授業の本質的改善に直結する活動に集中できるものを目指すことを主眼としていたため、「ひろば」はそのような要求に応えるようにはできていない。本稿ではこのような強制に意味があるかどうかの議論に立ち入ることはしないが、今後、外的要因によりそのようなことを可能にする「ひろば」とは別の仕組みの導入を検討せねばならなくなる可能性は否定できない。

この「教員の利用促進」問題に関して最も重要なことは、「ひろば」を単なる「目安箱」「苦情相談所」のように認識してもらっては困る、ということである。あくまでも授業内容を補完し、その進行を補助するための、授業時間外での活動の場と捉えてもらいたいし、そうなるとような利用法を考案してもらいたい。また、例えば利用法を考えるヒントを得るための機会として、年度終了後等に「ひろば」

を利用してみた教員同士による意見交換会ないし情報交換会の開催も検討してはどうか、との提案も頂いている。このような建設的な提案も、立場を問わず、ぜひ「教養の森」センターにお寄せ頂ければ幸いである。

「教養の森」の実りを豊かにするため、和歌山大学の教養教育に参加する全ての人々による積極的で自由な活用がなされることを期待する。

Notes

¹ 今回のシステム立ち上げに当たって採用した各用語もいずれ時代遅れになっていくことは言うまでもないが、「ひろば」システム自体もいずれ改変・更新していかねばならないことも明らかなので、それに伴ってその時々での up-to-date な用語を採用すれば良い、という立場をとっている。

² <http://www.wakayama-u.ac.jp/kyoyonomori/hiroba/readme.html>

Acknowledgments

「ひろば」公開早々に利用するだけでなく、利用状況の報告、具体的改善点や新しいアイデアの提案等をして頂いている遠藤史・尾久土正己・菅原真弓の各氏にお礼申し上げる。その各氏の試行的とも言える利用提案に応じて実際に書き込んでくれた学生諸氏にもお礼申し上げたい。また、立ち上げに際し画像を利用させて頂いた雑賀ひかる氏に感謝申し上げます。

References

尾久土正己、「リアクションメールを使った授業改善の試み」、和歌山大学「教養の森」センター年報、第2号、pp.48－55（2015）。